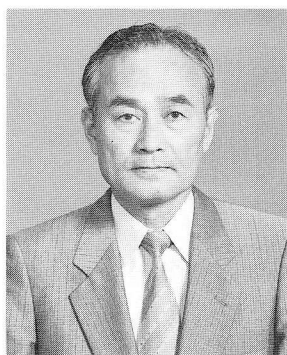


友校の頁

先輩校



大阪工業大学航空部 OB 会長

船 橋 賢一郎

昭和32年大阪工業大学卒業
浜崎産業株式会社勤務

昭和28年大工大航空部を創設し、はと K-14 型プライマリーを製作した。

昭和31年立命館大学近藤巖氏と共に、再建された日本学生航空連盟関西支部 第1号の滑空機三整を取得。

その後上級を取得したが、初めての受験者なので新しく試験問題を作ってもらうのに随分日数がかかったのも思い出の1つ。

正大寺会(高松時代 OB 会)の世話役幹事と学連関西 OB 懇親会常任幹事の1人として努力している。

私が持っている「航空朝日」という月間誌で昭和16年7月号に、生駒山滑空場完成記念「滑空訓練大会」が5月18日に、83名の翼の少年たちが参加して行われた記事が掲載されています。そして高級滑空機訓練部門の教官として牧野伊兵衛(同大)、館内(法大)、藤倉(明大)初め計12名が指導したとあります。

昭和27年に日本学生航空連盟が再建され、関西支部の合宿練習がはじまったときは大工大も同時期に参加しました。そのとき牧野伊兵衛教官(同大)、牧野鐵五郎教官(同大)をはじめ多くの大学、朝日新聞社航空部、その他のご指導を受けました。そして多くの訓練生が育ちました。

大工大の前身である摂南工専では、昭和10年に航空部が活躍していました。歴史的には同志社大学も大阪工業大学も同期の桜といえないことはありませんが、戦前からの航空界への貢献や戦後の学生航空の育成に多数の同志社大学卒業生が携わっていて、やはり先輩校であることを感じます。

近年は学生教官がいて、学校別に合宿練習があり、お互いに指導し合うシステムとなっていて多数の大学が航空界に貢献しています。

私共も学生教官のみならず、活発に活動する航空部作り、機体整備できる三整の技能習得、関西 OB 懇親会等を通じて、及ばずながらも貢献努力をしたいと考えています。

同志社大学は今後も良き先輩校として他の先輩校と共に後輩校のご指導をしていただくことを希望します。

北尾直敬日本学生航空連盟訓練部長退任

昭和27年同志社大学入学。航空部に入部。同31年卒業後日本学生航空連盟に奉職、以来計40年間のグライダー生活を続けて来た。

その間に卒業させた学生数は関西・東海支部のみでも2,000人をこえる。学生後輩への日頃の指導は言うまでもなく、競技会や各会合の世話、学生の免許、資格の取得の応援等々学生航空界の発展への功績は偉大である。

『直敬サンご苦労さん会』は加盟各大学幹事の世話で開催。

関西は1992年6月27日(徐園)参加者184名。東海では6月13日に80余名の各校OBが集まって励ます会を行いそのご苦労を讃えた。

北尾氏はこれからも学連に在籍して、今後も指導にあたる。



参集した同志社OB

グライダー半世紀

日本学生航空連盟 前訓練部長

北 尾 直 敬

PART (I)

同志社大学に入学した昭和27年は、戦後の混乱が少しづつ秩序をとりもどし、日本の航空界も再発足する時期にあたる。

戦時中赤とんぼの教官として空を飛んだ叔父へのあこがれから、迷わず航空部に入ったことが、人生を決めた。

高校時代は野球部で夜遅くまで練習に明け暮れていたが、グローブを操縦桿^{かん}に持ちかえ私のグライダー人生がはじまった。

在学中の4年間、アルバイトとして2年間学連職員として35年間、合計41年間にわたり現在もなお続いているとは神ならぬ身の知るよしもなし。それが地獄か極楽か、いまだに定かでない。

当初京都府井手町玉水八百忠旅館(いまでも営業中)を合宿所に、木津川河川敷で訓練を開始した。河川敷でレースやモトクロスまがいの走行を見るたび、昔ののどかな川原はどこに消えたかと、胸ふさがる思いである。

また教官の資格を取得するため青野が原で実施

した合宿訓練は、今の教証合宿の始まりで、訓練生は軍隊帰りの方々も多く、故牧野伊兵衛、故八木匡、牧野鐵五郎、結城永二郎、送別会で書「翼」を頂いた今井潤一(凌雪)など多士済々である。私は訓練の応援学生とし参加した。教官は山田八郎氏であった。

先日来カンボジアに派遣される自衛隊員のニュースでたびたび青野が原演習場が登場し歴史の齒車が戦後50年を経て再びまわり始めたことを肌を感じている。

関西の委員長、副委員長など学生側の体勢も歩調を合せ、学連の基礎固めができてきた。

その当時、学生同志の結束は他大学を含め現在では想像できないほど固かった。

高松空港で共に合宿暮しを経験した仲間たちが集い、「正大寺会」と称して食べ物のがなかった話、新聞社に行って委員会よりもうどんを食べるのが楽しみだった話など青春の思い出話をさかなに飲む会があるが、学連時代の話と共に次稿にゆずりたい。

うずら野、高松、富山、八尾、岡山、福井、木曾川と関西だけでも各地の空港・滑空場で学連と地元の調整にかけまわり、やっと今日の形ができた。その間に築いた最大の財産は多くの方々と断ちがたい心のきずなと人脈である。

PART (II)

現在への道のりは学連50年史、航空部50年史にゆずるとして、豊かな時代に生れ、育った新人類と分類される学生・OB 諸君に苦言を呈しておきたい。

滑空スポーツは近年テレビや週刊誌で続々ととり上げられ、パラグライダー、モーターグライダー、

熱気球、等々枚挙にいとまがない。また、パイロットやスチュワーデスの高給と仕事も若者のあこがれの的である。

それらの華やかさに目をうばわれ、本来の「重力にさからって飛ぶには、「安全」「確実」、が不可欠である」ことを頭で理解し、身体感覚でつかんだつもりになっている諸君が多い。

学連で行なってきたトレーニングの第一は「身体で覚える」ことである。その中で「日常生活体験すべてが空での安全につながる」として、グライダー訓練と同じ比重で合宿生活全般を指導してきた。

飛ぶ＝落ちる。99.99% 安全であっても残り0.01% に不安があれば、確実とはいえない。

空を飛ぶことは受験と全く次元が異なるのだ。

夏合宿北海道での事故は、「飛ぶ」以前の未熟な判断が原因である。

宇宙時代、エンデバーを成功に導いたものは綿密な計画と飛行士個々の適応への努力である。学生、OB 諸君も空へのあこがれを満すために入部したのならば、他校と差をつける必要はないし、ええかっこうする必要もない。慎重すぎるほど綿密な計画と調査、適切な状況判断をする能力を養うことだ。これなくして行動するのは経費と時間の無駄である。観光と訓練・二兎を追うものの一兎を得ぬばかりか、マイナスイメージが残る。

私がここまで事故にこだわるのは後輩山田君の事故を人生の痛恨事として生涯忘れないからである。この苦言を亡き山田君・彼岸回向のため同志社大学航空部現役、OB、教官諸君に捧げる。

1992.9.21(昭和31年卒)

“チョッケイさん”

吉 川 禎 一

「北尾訓練部長ご苦労さん」について翔友VIIIに寄稿する様指示をうけ、学連の訓練部長なるものを新らためて見直してみると、我々の世代ではすぐ伊ベエさんの顔が浮んできます。チョッケイさんとは長い付き合いですが彼の学連訓練部長と云う公の表の顔については殆ど知らない事に気が付きました。即ち北尾訓練部長に直接指導を受けた多数の連中から見ると、彼はエライ、ウルサイ、コワイ、ワガママ、ヘンクツ、そのくせオヒトヨシ、メンドウミの良い、教官のチョッケイさんであるかも知れませんが、私の知っているのは肩書きを取った単なる酒飲みの親友“チョッケイ”です。

しかし乍ら、彼が航空功労賞を始め種々の表彰をうけ、彼の永年に亘る航空分野に於ける後輩の指導、育成に費した努力と業績は公に認められており、又現役時代には学連関西支部副委員長をやり、戦後初の学生に依る高松－徳島 100km の野外飛行機曳航を関学の安田、亘理の3名が成し遂げた。その他関西選手権大会では第1回、第2回、と連続優勝の功績を残しています。学連の教官になってからも、各地の航空ショーでグライダーのデモフライトをやったり、或は記録に挑戦し、オーストラリアに学生を連れて行き、自分も飛んで来る等々。大いに活躍している事を再認識しました。(多分もっともっと私の知らない活躍と貢献をした事と思います)。そして学連の牧野(伊)、石田、両先輩を始め、牧野(鐵)、八木(明治 OB)、松田(関大 OB)、等々の諸先輩の後を引継ぎ、縦社会の学連で、又無責任な評論家の多い内にあって、よく学連の伝統と、日進月歩の激しい空の世界で常に新しい情報、技術、理論、を消化し、安全第一をモットーに後輩を指導して来た事に敬意

をはらいます。

私事ですが32年(1957年)に私は名古屋に勤務しましたが、チョッケイさんも卒業後暫くして学連職員となり時を同じくして名古屋勤務となりました。それ以来一段と腐れ縁が深まり、名古屋の夜の巷をよく徘徊したものでした。更に翌年藤田圭一(学連委員長33年卒)が名古屋の大手鉄鋼問屋に就職し、テレビ塔のすぐそばの社宅に1人で住んでおり、そこにチョッケイ、大岡(31年卒)、岩ヶ谷(34年卒)、小生等が集まり例の如く酒盛をした記憶があります。

学連東海支部は関東、関西、西部、に遅れ30年(1955年)に発足し、各務ヶ原の航空自衛隊のあの広々した基地のなかでプライマリーの訓練が伊ベエさんを始めチョッケイさん(新米の教官)等が主体で動き出していました。当時は名古屋市内から名古屋空港の横を通り犬山経由、名務ヶ原迄は非常に長い道のりの様に感じましたが、スクーターに乗って何度かのぞきに行きました。

34年には猛威をふるった伊勢湾台風をお互名古屋で経験しました。当時仕事も忙しくこれと云った記憶はありませんが、37年第12回全国大会で入賞した長谷川節子(南山大、戦後関西、東海、初女性ライセンス取得者)山田正勝(愛知学院大、現全日空機長)、を引き連れ突然我が家に押しかけて来、今からここで祝勝会をやるからと……、家内共々苦笑しながら、あわてて買い出しに行った思い出があります。彼も東海支部を他支部に追い付き、追い越すべく必死の思いで指導したので教え子の入賞が非常に嬉しかった様子でした。彼は今でも我が家に“タダイマ”と云って突然現れる事が年に何回かありますが家族は慣れており驚きませんが……

その後私は病気で1年休んだり大阪、福岡、或は出向等々転々と変りました(引越しは17回の記録です)。そして52年末に又々名古屋勤務となりましたが、その頃木曽川の R/W や宿舍が整備され稼動しており、今度はチョッケイと太陽のもとで会う機会が増えました。彼がこの滑空場の開発に当り非常に情熱を傾けて働いた様に聞いています。建設省、航空局、議員始め、地元関係有力者等々巾広くよく人々と根廻しや折衝、時には自腹を切ってまでもそれらの人々とのスムーズな関係を維持する努力をし、更に安全確保の為 R/W を拡張し宿舍を建て直すなどし、現在の姿になっていますが、時には真夏の炎天下、昼の休憩中、1人 R/W で耕耘機? を使ってもくもくと整地しているのを偶然目撃した事がありました。

先に書いた様に彼は非常に個性が強く、と云うかあくが強く。彼に接した人々は好き嫌いが全く2分する事と思いますが、先のチョッケイさんご苦労様パーティでは、かくも大勢の人々が集まったのは彼の過去を評価しての事と思います。(東海支部でのパーティも非常に盛大であった様です)。

昔の事です、航空会社から誘い話があり相当迷い悩んでいた時期もありましたが、チョッケイが手を引いたら、学連はどうなるねん! と彼の人生を無視した全く無責任なハッパをかけた事がありました。

いずれにしろ彼について色々と評論する人がいますが、学校卒業後停年の今日迄30数年間学連一筋に後輩を指導育成し、航空界に貢献した事について、我々は素直に感謝しなければならないと思います。

“チョッケイさん” 本当に長い間ご苦労さん!

これから多くの人々に大空の夢と楽しさを色々な面で伝えて下さい。又今回学連の袴を脱がれたのですから、母校同志社航空部も宜敷く指導してやって下さい。

(昭和30年卒)

